バルザック『暗黒事件』の裁判の場面における言語の機能

松村　博史

はじめに

バルザックの作品を見渡してみると、裁判の場面が頻繁に描かれていることに気付かないわけにはいかない。その例を求めるならば、『村の司祭』におけるフランソワ・タシュロンの裁判の場面や、この論考で扱おうとしている『暗黒事件』のマラン誘拐をめぐる裁判などを容易に思い浮かべることができる。しかしこの他にも『赤い宿屋』での殺人事件に関する裁判、『娼婦の栄光と悲惨』のクライマックス場面でのリュシアンの裁判など、枚挙にいとまがない。『人間喜劇』以外のバルザック作品でも、初期小説『アネットと罪人』や、『風流滑稽譚』に収められた「妖魔伝」のような一風変わった擬古文の物語にまで裁判の場面が登場するのである。

このようにバルザックが繰り返し裁判の場面を描くのは、作家の伝記的事実によるとされることが多い。バルザックは1816年から1819年にかけてパリ大学法学部で学び、法学バカロレアの一次試験にまで合格している。またこれと並行して代訴人ギヨネ＝メルヴィルの法律事務所に見習い書記として入り、そこで本人の言う通り、小説世界における「事件を動かすために十分な訴訟手続きを学ぶことができた」[1]という。バルザックはのちに、公証人パッセの事務所に移り、書記として働きもした。この作家についての最も優れた伝記の著者であるロジェ・ピエロが書いているように、バルザックはこうした経験をするうちに、「数多くの法律に関わる実例を知り、それらを銘記することによって、家族の深く秘められた秘密や、訴訟の事例に満ちあふれた作品をより豊かなものにすることができた」[2]と考えることができよう。

またバルザック自身が直面した事実で、これに劣らず重要な意味を持つのは、彼と彼の家族を多かれ少なかれ巻き込んだ犯罪事件である。この点についてはまず、作家の叔父であるルイ・バルサの事件を挙げなければならない。バルザックの父ベルナール＝フランソワの末弟であるこの人物は、「身持ちの悪い娘」で妊娠六ヶ月であったセシル・スーリエを殺害したかどで1818年に逮捕され、翌年死刑となった[3]のであった。そして1839年には彼の出版界の友人たちを巻き込んだペイテル事件が起こる。妻と使用人を殺害したとして有罪判決を受けた公証人ペイテルの罪を晴らすためにバルザックは大いに奔走し、彼を弁護する文章までものしたが、結局はそれも徒労に終わり、被告は死刑に処せられた[4]。

バルザックの作品で描かれる裁判の場面について語るなら、こうした伝記的事実を考慮

に入れるのが必要不可欠であるのは言うまでもないだろう。しかし作者がこの分野について語るのに十分な題材を持っており、それに恐らく大きな関心を寄せているからと言って、それが必ずしも作品の中に頻繁に裁判の場面が現れる理由とはならないと主張することも同様に可能である。したがって、次のように問題提起をすることができるだろう。バルザックの作品において司法が問題となる場面は、どのような役割と意義を持っているのか。これらの裁判の場面が小説にいかなる文学的価値を付与するのであろうか。この論考では、『暗黒事件』の裁判の場面における言語の分析を行うことによって、これらの問題に答えていくことにしたい。

1. 無実の死刑囚たち

バルザックが描く裁判においては、しばしば死刑宣告を受ける被告人が登場する。そして前述したように、これらの事件については、ときに小説上の事件と現実の事件との間に直接的な関係を認めることができることもある。例えば『村の司祭』におけるタシュロンの事件は、遠い過去に起こったルイ・バルサの事件を想起させると同時に、小説テクストの中でも言及されているように、裁判官フュアルデスの殺人[5]という同時代の事件にも関連しているのである。一方『暗黒事件』は前述したペイテル事件の直後に書かれているし、それと同時に作者自身が前書きで述べているように、1800年に起こった上院議員クレマン・ド・リの誘拐事件に取材している[6]。

そしてこれらバルザック作品における死刑囚たちのもう一つの共通点は、彼らが不当な判決を受けているということである。『赤い宿屋』におけるように全くの無実のこともあれば、グララン夫人への恋から殺意も計画もなく殺人を犯してしまったタシュロンのように、情状酌量の余地があるにもかかわらず死刑判決を受けてしまう場合もある。『暗黒事件』の場合には、オートセール兄弟、シムーズ兄弟と使用人ミシューという五人の被告人は、ゴンドルヴィル伯爵の誘拐に関与していなかったにもかかわらず、裁判のあとでシムーズ兄弟は懲役刑、オートセール兄弟は徒刑を科せられ、ミシューは死刑判決を受ける[7]。この作品の下敷きとなっている現実の事件に関して言えば、バルザックはペイテルの無罪を信じていたし、S.-J. ベラールの分析によれば、クレマン誘拐事件の首謀者シャルル・ゴンデと二人の共謀者は、司法の追求を免れているとのことである[8]。

もしバルザック作品における裁判の場面が、こうした司法の過誤をテーマとしているならば、バルザックが演出する法廷での発言は、司法の不当さに対する、とくに弁護側からの異議申し立てがその第一の意義であるということになるだろう。この異議申し立ては明らかにレアリスム文学的な企てだということができる。というのも、それは同時代の社会に対する糾弾の行為だと解釈することができるからである。『暗黒事件』においては、マ

ラン（のちのゴンドルヴィル伯爵）の誘拐事件はナポレオンによる第一帝政時代を背景として展開される。本作品の裁判における弁論は、とりわけこの側面からまず検討されなければならない。

この観点からすれば、弁護側の雄弁さが大きな重要性を帯びるのは当然であろう。『暗黒事件』においては、とくにこうした雄弁さを体現しているのは弁護士のグランヴィルである。テクストにおいてはまず、判事たちの前では被告がいかに無力な存在かということが、代訴人であるボルダンの口から語られることになる。

> 「社会が司法というものを発明して以来、告発された無辜の存在が、裁判官が犯罪に対して行使できるのと同等の力を手にする方法が見いだされたことはなかったのです。[…] 無罪の人々にはただ論証という武器があるだけですが、この推論もまた判事を動かすことはあっても、陪審員の偏見の前では無力なものなのです」（p. 646）

従って被告がこの裁判に勝つのは奇跡としか言いようがない。しかしボルダンによれば、グランヴィルはまさに「彼が知るあらゆる人物のうちでも、この奇跡を起こす能力を最もよく持ち合わせている男」（*ibid.*）なのだという。また別の箇所においても、グランヴィルが「この弁護を引き受けたのは、それが華々しいデビューを飾る絶好の機会になりうるから」（p. 642）だと書かれているが、ここでもまた雄弁家という側面が強調されていると言える。

そして実際にグランヴィルは口頭弁論において、弁護士としての才能を確実に示すことになり、この犯罪事件によって彼は名を上げた。テクストの中では彼の弁論は次のように特徴づけられている。

> まず彼は口頭弁論を行うにあたって、われわれが今日ベリエにおいて賞賛するような情熱あふれる雄弁さを見いだした。次いで彼には被告の無罪についての信念があった。これは弁舌の最も強力な武器となりうるものである。（p. 663）

こうして弁護側の言葉は突如として司法の声、真実の声としての意味合いを帯びることになる。そしてこの真実性は、弁護側により発せられた言葉が感情表現を伴うことによって、なお一層強調されるのである。グランヴィルは単に被告の無実を確信しているのみならず、口頭弁論においては「崇高」であったり、「熱く」なったりするし、時には「叫び声」をあげることもある（p. 671）。一方被告のミシューは「被告席の台を大きなこぶしで叩い」て怒りの気持ちを表明したり（p. 659）、グランヴィルの口頭弁論の真実性を裏付け

るかのように涙を流したりもしている。

> グランヴィルの雄弁な声によって無実を証明され、ミシューの黄ばんだ目から涙があふれていかめしい顔の頬を伝う瞬間もあった。そうした時に彼は真実の姿を現したのである。それは子供のように単純で狡猾な人間、しかし生涯を通じて一つの思いを抱き続けた人間の姿であった。この人物は突如として説明されたのである。とりわけ彼の涙は陪審員に大きな影響を及ぼした。(p. 663)

社会に対する真実の表現としての裁判の言語という概念において、この場面は同時代に書かれた他の有名な裁判の場面に通底するものがある。とりわけスタンダールの『赤と黒』の最後の方に出てくる裁判の場面を思い浮かべることができるだろう。そこでは主人公のジュリアン・ソレルが、レナール夫人に対して発砲した罪状を認めながらも、自らの行為を説明する。彼はそこで「自らの身分の卑しさに反抗した一人の百姓」としての思いを打ち明けるのである[9)]。

2. 語りえぬ言葉

だが一方で、バルザックにおける裁判の場面の言語は他の作家には見られない、もう一つの際立った特徴を示している。それは、バルザックの作品に描かれる裁判の場面では、つねに一つあるいは複数の謎が大きな位置を占めており、それが裁判において語られる言葉を歪め、ある意味でそれを支配しているということである。『暗黒事件』にもそれは当てはまるが、ここでは事件を取り巻く二つのレベルの謎をまず最初に区別しておかなければならない。

最初の謎というのは、この裁判の被告たちが誘拐が行われたまさにその日に、シムーズ家の隠し財産である「森の外れに位置している館に隠された金貨十一万フラン」(p. 618)を取り出し、サン＝シーニュの館に移そうとしていたということである。彼らはこの事実を隠さざるをえなかった。というのも、代訴人ボルダンが語っている通り、もし彼らがそのことを公判の場で言えば、全員が「泥棒として徒刑に科せられる」(p. 644)ことになるだろうからである。そして二つ目の謎とは、グランヴィルは何らかの策謀の存在には気付いていたが、誘拐の真犯人は不明のままだということである。まさに「これは私が生涯目にした中で最も暗い闇に包まれた事件です」とボルダンが述懐している通りであり、『暗黒事件』というタイトルが示す通り、まさに作者バルザックも事件をそのように描こうと意図していたに違いない。ここで強調しておかなくてはならないのは、一つ目の秘密はそれを隠そうとした被告たちの知るところであったが、二つ目の秘密は物語の最後まで明か

されることがないということである。

かくして、裁判において語られる弁護側の言葉は、それが真実や正義を意図するものであっても、必然的に欠落した不完全なものとならざるをえず、さらには偽りを含むものとなってしまうのだ。被告人たちは時には隠し財産についての事実をごまかすために嘘を言わざるをえなかったり、この事件において起こったことがらを単に説明することができないことが起こってくる。裁判の前にサン＝シーニュ嬢を交えて語らっている場面で、「われわれの主張を通すのは難しいですな」と言ったグランヴィルに対し、ボルダンは「われわれがもはや真実を言うことができない以上、なおさらそうです」(p. 644)と答えている[10)]。

こうしたことから、シムーズ兄弟とオートセール兄弟はノデムの森に出かけた理由を隠すために、狼狩りに出かけたのだと主張するしかなかった。

> 彼らの遠出を正当化する必要があったため、被告たちはそれを狩りのせいにすることを思いついた。農民たちがその数日前に森で狼を見かけたと言っており、彼らはそれを口実にしたのである。(p. 656)

彼らは同様に、外出した時間についても虚偽の証言をした。「サン＝シーニュの館で昼食を取るために一時には戻ってきた。そして三時から五時半まで食事を取ったあと、再び森へとやってきた」(p. 655)のだと主張したのである。このように言えば、彼らは誘拐が行われた時間帯にはサン＝シーニュか森のどちらかにいたことになる。

一方ミシューの方は、マランに銃を向けたことはないと主張する。彼が服を汚したのは「家に戻る時に穴に落ちたから」であり、漆喰を使ったのは「溝道の柵の杭を固めるため」(p. 657)だと説明した。しかしそれは全くの偽りであり、漆喰は財産を隠した穴蔵をふさぐために用いられたのであり、服装の汚れもその時のものだったのである。「彼の服装の状態や、今や隠し通せなくなった漆喰の使用が大きな重要性を帯びてきたのを見て取って、彼はこうした言い逃れをひねり出したのだった」(p. 657)とテクストにはある。

証人を対象とした第二の口頭弁論においては、謎めいた策謀が問題となった。そこではゴンドルヴィル家の中庭に馬で乗り入れたのが被告たちではないとすれば（というのは、読者は彼らが無実であることをすでに知っているので)、それは誰なのかという点が重要となる。被告たちも、証人たちも、あるいはグランヴィルやボルダンでさえも、それら未知の人物たちが誰なのかを言うことができない。というのは彼らは単にそれを知らないからである。グランヴィルもそれが「ミシューに非常によく似た人物」(p. 660)だとしか言うことができない。同じくローランス（サン＝シーニュ嬢)は、ただ遠出のときに見たも

のをありのままに報告するだけで、それが何なのかも説明できないのである。「サン＝シーニュに戻る途中で煙を見て、火事か何かだと思った、と彼女は無邪気に答えた」(p. 661)とある。また彼女は「風に飛ばされてきた紙の燃えかすのようなものが乗馬服の飾りひもや襟の折り目についているのに気付いた」(同)とも答えるが、その煙や燃えかすが何だったのかについては全く知るよしもないのである。

これまで見てきた通り、これらの弁護側の発言には、言ってはならないこと、言うことができないことが至るところに含まれている。その結果、バルザック作品における裁判の言語を特徴づけるのは、こうした「語りえぬ言葉」であり、それは「語られた言葉」と「語られない言葉」の戯れあるいはせめぎ合いとして機能していると言えるのである。それに加えて、この欠陥を含み偽りに満ちた言葉をいっそう際立たせるように、弁護側はそれぞれの発言を体系化し、しかも一つの「小説」として組み立てようとしさえする。バルザックの裁判言語が持つこうした面は、しばしばテクストの中で強調されている。

「それに、弁護においては完全な論理体系を組み立てる必要があります。そこから出てはなりません。そして無辜のうちに滅びることです」(p. 646)と、代訴人ボルダンは裁判に先立って顧客である被告たちに諭している。そして実際にも被告たちは論理のほころびを少しも見せることなく、首尾一貫した嘘をつき通すのである。「被告人全員が見事なまでのまとまりをもって答弁した」とテクストにはある。そしてすぐあとには次のような一節がある。

> 無罪を証明するには、自らの行動に関する明快でもっともらしい説明がなされなくてはならない。したがって弁護側の義務とは、告訴した側の嘘めいた小説に対抗して、真実らしい小説を打ち出すことなのである。(p. 656)

また前に述べた服の汚れと漆喰に関するミシューの「言い逃れ」については、もっともらしい「作り話」と特徴づけられている。「もし司法において、真実が非常に作り話めいて聞こえることがあるとすれば、同様に作り話が非常に真実に似ているように思われることもある」(p. 657)。そしてまた最後に付け加えるなら、この裁判は「まさに奇跡的にもたらされた新しい証拠によって弁護側の嘘が明るみに出」されることによって、すなわち真実らしく作られた小説が見破られることによって、原告側の勝利に終わることになった。誘拐された上院議員マランが沿道で発見され、彼が被告側にとって不利となる動かぬ証拠をもたらしたのである。しかし彼が発見されるに至った過程は、誘拐されたときと同様、被告たちにとっても謎に包まれたままであった。

このようなバルザックの作品に登場する裁判の場面における言説の特殊性は、他の十九

世紀文学の有名な裁判の場面と比較してみればより明確になるように思われる。

例えば前にも紹介した、スタンダールの『赤と黒』におけるジュリアン・ソレルの法廷における行動は、『暗黒事件』の被告たちのそれとは正反対である。というのは、ジュリアンは何も隠さずにすべてを言う決心をするからである。彼はレナール夫人に向かって発砲した行為について、自らを弁護しようとさえしない。「『殺人です。しかも計画的殺人です』と彼は判事にも弁護士にも言っていた」[11)]。そして弁護士が彼に向かって、ピストルを手に取るところまで行ったのは嫉妬心のせいだと主張すれば、「その真偽いかんにかかわらず」(p. 774)[12)]弁論には非常に都合がいいのだがと持ちかけると、ジュリアンは激昂して、「その忌まわしい嘘」(p. 775)を二度と口にするなと弁護士を脅しさえしている。

ジュリアンはずっと「感情的になるのを抑え、何も言わない決心を固めてきた」(p. 781)が、判決の場になると「義務の観念に身を焦がされるのを感じ」(*ibid.*)、裁判長から何か付け加えることがないか問われると、立ち上がって発言を始める。彼は「胸につかえていたことを全て吐き出した」(p. 782)とある。ジュリアンはこの最後の弁論で、「自分の犯した罪は兇暴なものであり、しかも計画的であって、死刑に値する」(*ibid.*)としながらも、本質的には「卑しい階級に生まれながら幸いにしていい教育を受け、金持ちたちが誇らしげに社交界と呼んでいるところに大胆にも入り込もうとした」(*ibid.*)こと、すなわち「自らの身分の卑しさに反抗した」(p. 781)ことにより罰せられるのだと主張するのだが、ここは作者スタンダールがジュリアンの言葉を通して『赤と黒』全体を貫くテーマを表現するドラマティックな場面になっている。そこにはバルザックの裁判の場面で見たような、何かを隠さなくてはいけないとか、あるいは真実を歪めて嘘をつかざるをえないような状況は毛頭見られないのである。

フランス十九世紀小説で有名な裁判の場面としてはもう一つ、ユゴーの『レ・ミゼラブル』におけるシャンマテュー事件のそれが容易に思い浮かぶが、そこでも裁判における発言に謎めいたものは全く含まれない。作品の主人公であるジャン・ヴァルジャンは、正直な人間として生きていく決心を固め、地方の町でマドレーヌという名の市長になっていた。そんなある日、リンゴを盗んで捕まったシャンマテューという名の老人がジャン・ヴァルジャンであるとされ、裁判にかけられているという話を聞かされる。マドレーヌ市長はその裁判が行われている町に行き、法廷の傍聴席で様子をうかがうのである。そこで彼が目にしたシャンマテュー老人は無実であり、そもそもジャン・ヴァルジャンが誰であるかも知らないのだから罪を告白するはずもない。「この追求と、証人の一致を前にして、被告は何よりも呆然としているように見えた。彼は身振り手振りで違うと言いたげな様子だった」[13)]。こうしてシャンマテューにいよいよ有罪の判決が下されようとしたときに、マドレーヌ氏は傍聴席から立ち上がって、自分こそがジャン・ヴァルジャンであると名乗り出

るのである。

「あなたたちはもう少しで大きな過ちを犯すところでした。この男を釈放しなさい。私は義務を果たします。私がこそがその不幸な受刑者なのです。この場ではっきりと物事が見えているのは私だけです。そして私はあなた方に真実を言いましょう。[…]もうおわかりでしょう。私がジャン・ヴァルジャンなのです」(p. 220)[14)]

この発言を受けて、テクストには「この男の出現は、一瞬前までかくも謎に包まれていた事件をすっかり明らかにするのに十分だった」(p. 222)、それは「電撃的な解明」(*ibid.*)だったと述べられている。

今見てきた二つの例において、『赤と黒』のジュリアン・ソレルにしても、『レ・ミゼラブル』のマドレーヌ氏すなわちジャン・ヴァルジャンにしても、裁判の場においては「くもりのない真実」を語っているのが印象的である。これらは『暗黒事件』における被告たちの言動とは対極にあることがよくわかるだろう。ここに挙げた二つの例は、両方とも十九世紀フランス小説を代表する有名な裁判の場面であり、中でも主人公たちが発言する瞬間はドラマティックな盛り上がりを見せている。バルザックの裁判の場面、そして登場人物たちの発言はスタンダールやユゴーの例ほどドラマティックではないかも知れないが、しかしそこに見られるのは言語の全く異なる次元の使い方である。『暗黒事件』(1841)は、年代的に見れば『赤と黒』(1830)以降、『レ・ミゼラブル』(1862)よりも以前に出版されているのだが、バルザック作品の裁判における言語の機能は本質的な新しさを持ったものだと言うことができるだろう。

ここで再びバルザックの『人間喜劇』に戻るならば、他のいくつかの作品においても、『暗黒事件』で見られたような謎や不完全な言葉の存在を見いだすことができる。例えば『赤い宿屋』では、工場主のヴァルヘンファーが殺害され金が奪われた事件について、罪をかぶせられたプロスペル・マニャンは自らが潔白であるという真実を軍法会議の場において「言う」ことができず、銃殺刑になってしまう。彼は犯罪が行われた前夜に自らヴァルヘンファーに対する殺意を抱いて危うく犯行を起こしそうになったこと、そして無罪を主張することが一緒に旅をしていた友人フレデリック・タイユフェールに罪をかぶせることになることなどから、無意識に自らの言葉にブレーキを掛けてしまうのである。プロスペルが処刑される直前に、同じ牢にいて彼の告白を聞いたというヘルマンは次のように言っている。

「彼は自分が有罪と無罪の両方であると信じていました。犯罪の誘惑に対して、彼は

実際にはそれに抗う力があったのでしたが、しかし彼はそのことを思い出して、自分が眠っている間に夢遊病の発作によって、彼が目覚めながら夢見た犯罪を実行に移してしまったのではないかと恐れていたのです」[15)]

「それはすでに私が頭の中で考えたことに対する罰だったのです」(p. 105)と、プロスペルはヘルマンに対して打ち明けている。そして彼の友人であるフレデリック・タイユフェールについては、次のように語っている。

「『しかしあなたの道連れの方はどうしたのですか？』と私が彼に言うと、彼はかっとなって叫びました。『ああ、ヴィルヘム[16)]にそんなことできるはずが……』彼は言葉を最後まで続けることさえできませんでした」(pp. 107-108)

すなわちプロスペルは友人が犯罪を犯した可能性を口に出すことさえできないのである。

一方、『村の司祭』に登場するジャン＝フランソワ・タシュロンは、バルザック作品における裁判を特徴づける「語られざる言葉」の一つの極端なケースであると言うことができる。彼は「徹底した黙秘」[17)]の中に自ら閉じこもるが、それも共犯者であるヴェロニク・グラランの名前を出さないためであった。かくして裁判のすべてが、それに関する町の噂も含めてこのタシュロンの「語られざる言葉」を中心に転回することになるのである。

これまで地方の一都市が、毎晩の聴取のあとのリモージュの町ほどに興味をそそられたことはなかった。そこでは誰もが裁判についての想像を膨らませた。あらゆることがらが被告の姿を巨大なものとし、答弁は皆の口から口へ物知りげに繰り返され、枝葉をつけられ、注釈を加えられて、尽きることのない議論を惹き起こした。(p. 691)

ここでは、タシュロンの黙秘という「言葉の空白」を取り囲むように裁判がより複雑で謎に包まれたものになり、さらに噂という言葉が際限なく拡張していく様子が手に取るように感じられるだろう。被告として裁判の焦点になっているタシュロンはもちろんのこと、毎日町の名士たちとともに自分の館で裁判の行方を見守っているヴェロニクにとっても、真実を口にすることは固く禁じられている。こうした謎めいた沈黙に包まれたまま裁判は重苦しい雰囲気の中で続いていき、最後にジャン＝フランソワ・タシュロンは真実を心の中に秘めたまま死んでいくのである。

3. 話し言葉と小説の叙述

ここまでの部分では、バルザックにおける裁判をめぐる言語が、「語られざること」「語りえぬこと」を中心として転回しており、「言われたこと」と「言われなかったこと」、言葉と沈黙とのせめぎ合いの場として定義されることを見てきた。一方、バルザック作品における裁判場面のテクストでは、これらの話し言葉がそれを取り囲んで支えている地の文すなわち叙述部分と非常にはっきりとした対照を見せている。というのは、小説における叙述部分は全知であることを前提としているからである。

裁判の前から、地の文では何らかの企みが存在することが知らされる。「工作員」たちの行動が次のように説明されるのである。

> そのとき、覆面をして手袋をはめた五人の男たちが部屋付きの召使いとヴィオレットに襲いかかったのだった。その男たちは背格好や身のこなし、動き方などがオートセール兄弟、シムーズ兄弟、ミシューに似ていた。彼らは猿ぐつわのようにハンカチで二人の口をふさぐと、食器室の椅子にしばりつけた。(p. 623)

だが読者には、被告たちがその同じ時に何をしていたかもわかっている。したがって四人の貴族と一人の使用人を罠にかけようとする企みが存在することが自ずから理解されるのである。またミシューが逮捕されたあとで、彼が獄中から送ったとされる偽の手紙をめぐる事件の顛末も説明される。

その上、地の文においては部分的な真実までもがほのめかされる。すなわちマラン自身と彼の友人であるグレヴァンがこの事件に一枚かんでいるという事実である。サン＝シーニュ嬢が遠出の際に見たとされる火についても、小説の叙述は「グレヴァンは火事の痕跡をきれいに消したことで鼻を高くした」(p. 662)と説明している。またグランヴィルがマランに「庭で何かの書類を燃やした」かどうかを尋ねたときに、マランがグレヴァンと「鋭い目くばせ」を交わした (p. 669)ことも描写してみせるのである。

しかし、小説のテクストは単に話し言葉の部分と叙述の部分を対置するばかりではない。興味深いことにこれらの対立する二つの要素は、同時に互いに混淆する様相も見せるのである。それは話し言葉を表現するのにいくつかの種類の話法を使い分けることによって行われる。時には一連のダイアログが直接話法で書かれ、また別の箇所では登場人物たちの話し言葉が間接話法により伝えられる。またある話法からもう一つの話法へ移行するところもあれば、ときには間接話法から自由間接話法へと横滑りしていくこともある。このような変化は『暗黒事件』のテクストの至るところに見られ、その全てを引用することはとてもできないが、いくつかの特徴的な例を次に検討してみることにしたい。

被告人質問の最初から、シムーズ兄弟の語る言葉が次の例に見られるように、間接話法から自由間接話法へと移行しているのを見て取ることができる。

> 彼らはそれぞれ、帰国して以来ゴンドルヴィルの土地を買い戻すつもりでおり、そして前日に着いたマランと交渉するつもりで、従妹のローランスやミシューと出かけ、言い値の基礎を定めるために森を調べに行ったと申し立てた。この間、オートセール兄弟は従妹[18]やゴタールとともに農民たちが見かけた狼を狩りに行っていた。(p. 655)

この引用の一文目は「と申し立てた」とある通り間接話法であるが、二文目は明らかに自由間接話法である。すなわちこの部分は地の文ではあるが、明らかにシムーズ兄弟の申し立ての内容になっている。だが上の部分でも見た通り、この部分は被告の間で口裏を合わせるための虚偽の申し立てに他ならない。

そして次の例は、間接話法から直接話法へと移行している例である。今度はミシューに対する被告人質問の場面である。前に引用した部分から続ける。

> 逮捕された際に衣服が汚れていたことを正当化するために、彼は家に戻る時に穴に落ちたのだと言った。「穴からよじ登ろうとしたがもう暗くて見えなかったので、溝道を這い上がろうとして踏ん張った時に、足元で崩れる石と言うなれば取っ組み合いしたわけなんでさ」と彼は言った。(pp. 656-657)

前半は間接話法、後半はミシューの言葉をそのまま伝える直接話法だが、どちらも虚偽の申し立てであることに変わりはない。

またこれ以外にも、直接話法でも間接話法でもなく地の文の一部でありながら、明らかに登場人物たちの言った内容を伝えているような文も見受けられる。例えば「グランヴィル氏は柵の状態を検分するために専門家を指名する必要があるようにいくつかの結論を提示した」(p. 658)のような場合である。それらの「結論」の内容は示されないが、グランヴィルがそれを裁判の場で「話した」ことを前提としている。あるいは秘密の穴蔵で発見されたワインの瓶がミシューに示された時も、彼は「それらを自分のものと認めたがらなかった」(p. 667)とある。これも当然、ミシューの答弁を踏まえた上でのものである。これらの文もまた、話し言葉の部分と小説の叙述部分とを媒介する機能を持っていると考えられる。

このように話し言葉を伝えるのに、さまざまに異なる様式が替わるがわる用いられてい

るのは、話し言葉と叙述部分との境界線を取払い、話し言葉を物語の中に組み込んで同化してしまおうとする試みではないかと考えられる。だがバルザックはどうしてこのような試みを行うのだろうか。もし『暗黒事件』のテクストにおいて、裁判の言語が不完全で、しかも虚偽に満ちたものとして提示されているのなら、どうしてこの話し言葉をより完全なはずの語りの部分に組み込もうとするのか。

それは恐らく、話し言葉の持つ自由さに訴えるためではないかと思われる。というのは、話し言葉は地の文に比べるとより自由で、自立的である。というのは話し言葉はある秘密を明らかにすることもできれば、それについて黙することもでき、あるいは望みのままに嘘をつくことさえできるからである。それに比べると叙述部分は物語の必然性によって制約を受けざるをえない。物語の流れを追わなくてはならないし、語る内容を制御しなくてはならないし、(少なくとも大っぴらには)嘘をつくこともままならない。地の文では、例えば被告人たちが実際には無罪であるのに有罪だということもできないのである。

もしこうした裁判言語の分析が、話し言葉の肯定的な面よりは否定的側面をより強調するように見えるならば、この問題を小説のより大きな文脈の中で見直してみることにしよう。すると、この作品において話し言葉が持っているもう一つの役割が見えてくる。すなわち、ここで事件の謎について最終的な解決をもたらすのは、物語の叙述部分ではなく、これもまた話し言葉なのである。すなわちド・マルセーによる打ち明け話がそうである。

この事件から三十年経って、とある内輪だけの親密な夜会において、ド・マルセーはサン＝シーニュ夫人とゴンドルヴィル伯爵（事件当時のマラン)との不和の理由を話す決心をする。実は事件はそれが起こった当時のもっと大きな政治的文脈に位置づけられるものであった。ド・マルセーは次のように語り出す。

> 「その政治家たちのほとんどはもう死んでいますし、もう彼らに気遣いする必要はありません。彼らはすでに歴史に属する人物たちです。そしてその夜の歴史は恐ろしいものでした。と言うのも、私しかそれを知るものがないからです。ルイ十八世もそれを哀れなサン＝シーニュ夫人に話しませんでしたし、彼女がそれを知ろうと知るまいと、今の政府にとってはどうでもいいことです」(p. 689)

すなわちこの瞬間まで隠されていたことが明らかにされるのは、まさに話し言葉によってなのである。そのド・マルセーの話の中で、裁判で問題になった庭で燃やされた紙が「革命政府の宣言、法令、決定や、ブリュメール 18 日で政権に就いた叛徒たちを非合法とする政令」(p. 693)などの書類であって、マランはフーシェのクーデター計画に加担してそれらの起草にあたったが、ナポレオンのマレンゴにおける戦勝によって計画が潰えたた

め、危険なものとなった書類をゴンドルヴィルの館の穴蔵に隠しにきたのであった。そしてこの話の中では、マランの誘拐についての真実までもが明かされる。

「五人の正体不明の男どもは帝国警察の手先で、ゴンドルヴィル伯爵がナポレオン帝政がもはや揺るぎないものになったと悟って焼却しにやってきた印刷物の包みを、同じく抹消する役目を帯びてきていたのでした」(p. 695)

すなわちマラン誘拐の真犯人は警察大臣フーシェの手先で、失敗したクーデター計画の証拠を隠滅しにやってきた連中だったというのである。彼らは印刷物がすでに焼却されたことを知らず、また他の書類を捜索する目的もあってマランを誘拐したのであった。

このド・マルセーによる秘密の暴露は、話し言葉の持っている絶大な力を象徴するものであるが、それはこの論考で考察した裁判における言語を特徴づける不完全さとは対照的に見えるかも知れない。しかしこれら二つの両極端なケースを見比べてみると、話し言葉が持つ無限の可能性がそこに示されているように思われる。恐らくバルザックは、こうした話し言葉の持つ包容力を物語の中に組み入れようとしたのではないだろうか。

おわりに

バルザックの小説『暗黒事件』は、現在に至るまで、主に政治的な側面や、当時の司法制度という側面から分析されることが多かったように思われる。最近の論考としても、例えば ミシェル・リシュトレは初めに紹介したペイテル事件を改めて詳細にわたって取り上げ[19]、バルザックがこの事件への関与を通じて、いかに「司法の深刻な機能不全」[20]と闘ったかを分析している。またリュシエンヌ・フラピエ＝マズュールは、バルザック作品中の王党派の陰謀における登場人物の性差が意味するものについて考察した論考[21]の中で『暗黒事件』にも触れている。だがこれまで、この作品に見られる裁判における言語がどのようなレトリックを使って組み立てられ、どう機能しているかについて、具体的に分析されたことはあまりなかったようである。

バルザックの作品では謎というテーマがつねに大きな役割を担っており、彼の多くの作品が一つあるいはいくつかの謎を巡って転回する。これらの作品においては、しばしば何が言われ、何が言われなかったかが問題となる。そこでは不完全だったり、偽りだったり、あるいは部分的に真実であったりする言葉がそれらの謎について語られ、人から人へと巡っていくのである。『暗黒事件』などの作品に見られるバルザックの裁判の言語も、まさにこうした話し言葉の特性という観点から考察されるべきものであろう。彼にとって裁判とは、まさに話し言葉の領域に他ならない言葉と沈黙との戯れを、最も豊かな形で機

能させることができる場なのである。バルザックの作品に裁判というライトモチーフがしばしば登場するのには、伝記的な理由と並んで、このように文学テクストにおいて、そこで使われる言語がいかに機能しているかという観点からも分析を加えるべきであろう。こうした考察を組み入れることによって、政治小説としての『暗黒事件』の理解も、なお一層深めていくことができるように思われる。

注

1) 『恐怖時代の一挿話』冒頭に置かれた代訴人ギヨネ＝メルヴィルへの献辞から。*Une épisode sous la terreur,* in *La Comédie humaine,* édition publiée sous la direction de P.-G. Castex, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, t. VIII, 1977, p. 433. 本論考において、バルザックの『人間喜劇』からの引用はこのプレイヤード版に拠るものとし、必要に応じて巻数と頁番号のみを示す。なお『暗黒事件』も同じ第8巻に収録されている。

2) Roger Pierrot, *Honoré de Balzac*, Paris, Fayard, 1994, p. 51. この論考におけるバルザックに関する伝記的事実については、主にこの本と高山鉄男『バルザック』、清水書院、1999 を参照した。

3) *Ibid.*, pp. 56-59. ロジェ・ピエロは恐らくこの事件が、バルザックの作品に死刑囚がしばしば登場する理由ではないかと述べている(p. 59)。

4) *Ibid.*, pp. 348-350. ペイテルは七月王政時代の国王ルイ＝フィリップを批判したパンフレット『洋梨の生理学』を出版しており、その一冊をバルザックにも献辞をつけて贈っている。バルザックをこの事件に引き込んだのは彼の友人で挿絵画家のガヴァルニであった。

5) *Le Curé de village,* in *La Comédie humaine, op.cit.*, t. IX, 1978, pp. 690-691. プレイヤード版の本作品に付された序文において、アンドレ・ロランは作品のこの部分と現実のフュアルデス事件との関わりについて解説している(*ibid.*, pp. 627-628)。

6) S.-J. ベラールはプレイヤード版の『暗黒事件』序文および注において、この事件について詳述している。Cf. *Une ténébreuse affaire,* in *La Comédie humaine, op.cit.*, t. VIII, 1977.

7) *Une ténébreuse affaire,* in *La Comédie humaine, op.cit.*, t. VIII, 1977, p. 671. これ以降、『暗黒事件』からの引用はこのプレイヤード版第8巻のページ数のみを記す。

8) この部分については、ベラールがプレイヤード版序文において解説を加えている(p. 472-473)。

9) Stendhal, *Le Rouge et le Noir,* in *Œuvres romanesques complètes*, I, édition établie par Y. Ansel et Ph. Berthier, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 2005, p. 781.『赤と黒』との比較については、あとでさらに詳しく触れる。

10) ベラールはプレイヤード版の注の一つにおいて、この状況をペイテル事件に関連づけて次のように述べている。「『もはや真実を言うことができない』、ここでバルザックは［…］ペイテル事件のことを考えているのではないだろうか」。恐らくペイテルは妻が使用人に抱かれているのを発見して殺人を犯したことは今日ほぼ確実となったが、「不幸なことにペイテルは最初無実を主張し、使用人に罪をかぶせようとした。それは明らかに虚偽であり、そのことによって情状酌量の利益を得ることができなくなってしまった」（« Notes et variantes », *op.cit.*, pp. 1562-1563）。

11) Stendhal, *Le Rouge et le Noir, op.cit.*, p. 774.

12) この段落と次の段落の『赤と黒』からの引用については、前に挙げたPléiade版のページ番号のみを示す。

13) Victor Hugo, *Les Misérables*, in *Œuvres complètes, Roman II*, Robert Laffont, coll. « Bouquins », 1985, p. 212.

14) この部分における『レ・ミゼラブル』からの引用については、注13）と同じBouquins版のページ番号のみを示す。

15) *L'Auberbe rouge,* in *La Comédie humaine, op.cit.*, t. XI, p. 107.

16) 物語では、ドイツ人であるヘルマンがもう一人の旅人であるフレデリック・タイユフェールの名前を忘れ、「ロマン主義や地方色に対して少しの敬意も払わずに」ヴィルヘムというドイツ風の仮の名前で呼んだことになっている。もちろんここでタイユフェールの本当の名前が明かされないことが物語の中で重要な意味を持つのだが、ここではそれには触れない。

17)「ジャン＝フランソワ・タシュロンは最初、徹底した黙秘を続けた。それは陪審を前にして証拠を突きつけられれば崩されるに違いないものだったが、そこには司法の知識に通じた人物、あるいは高度の知性を持った人物の指示があることが示されていた」（*Le Curé de village,* in *La Comédie humaine, op.cit.*, t. IX, p. 687）。

18) この従妹とはローランスのことだが、そうするとローランスは二手に別れたグループのどちらにも参加したことになる。これは明らかにバルザックの書き誤りである。プレイヤード版の注でもこのことは指摘されている（*ibid.*, p. 1569）。

19) Michel Lichtlé, « Balzac et l'affaire Peytel », in *L'Année balzacienne 2002*, pp. 101-165.

20) *Ibid.*, p. 165.

21）Lucienne Frappier-Mazur, « Le complot royaliste dans *La Comédie humaine* : traîtres, héros et viragos », in *L'Année balzacienne 2005*, pp. 241-263.